

“Rooms”- surrounding us as invisible boundaries

“间”- 我们彼此无形的边界

初次与杜蒙相见是在 2015 年于圣何塞开幕的 GAS 研讨会的会场上。她在 2013 年于罗切斯特理工学院“RIT”取得“艺术硕士”学位后，便留校住进了艺术家公寓，一边作为助教指导学弟学妹，一边也利用校内的设备继续进行着创作。但由于签证到期，她无法继续驻留在美国，我还记得她当时惴惴不安地念叨着几个月后就不得不回国的残酷现实。用玻璃创作作品需要用到各种各样的专业设备。在大学里进行创作就有这方面的便利——设备可以自由使用，而也正是因为有这样的条件，使得创作出来的作品数量繁多、种类丰富。对于许多学生而言，“如何在大学毕业之后营造出适合自身持续创作的环境”，已经成为了和“要创作怎样的作品”同量级的大难题了。尤其在来到美国学习玻璃之前，她一直活跃在平面设计领域，所以在中国缺乏玻璃工厂与玻璃教育机构联系的她，如果要在国内继续她的玻璃作品创作，将会遇见前所未有的困难。而同时这一经历也在本次作品的主题中被展现了出来。

私が初めて杜蒙に会ったのは 2015 年 San Jose で開催された GAS カンファレンスの会場であった。彼女は Rochester Institute of Technology“RIT”にて 2013 年に MFA を修得した後、アーティスト・イン・レジデンスで同大学に滞在し、Adjunct Faculty として後進の指導をしながら、学内の設備を使用して制作を続けていた。しかし、ビザの関係でこれ以上アメリカに滞在することができず、数か月後には中国に帰らざるを得ないということで、不安を語っていたのが今でも印象に残っている。ガラスで作品を制作するには様々な設備が必要となる。大学での制作は様々な設備が自由に使える、そのような環境があるからこそ出来る作品も多々ある。多くの学生が大学を卒業した後、制作を続ける環境をいかに作るかということは、どのような作品を作るかということと同様に大きな問題である。特にガラスをアメリカで学ぶまで、彼女はグラフィックデザインの分野で活躍してきた。中国でのガラス工場やガラス教育機関との関係に乏しい彼女が、中国国内で制作を続けるためには、幾多の困難があった。その経験は今回の作品のテーマにも反映されている。

2016 年，她在金沢国际玻璃展上获得了激励奖，也因此得缘来到日本。期间她希望能在爱知教育大学“AUE”针对自己的作品进行一次 PPT 讲演。讲演中她吐露了临近此次上海玻璃博物馆个展，却苦于没有合适的作品制作场地。我们向她提议可以驻留在“AUE”进行创作，也认为她的驻留创作一定也能给学生们带来很大的激励。讲演中，她也提及了在央美学习了平面设计后来到 RIT 继续深造玻璃艺术的经历，看到了东方与西方、设计与艺术之间的各种差异，并在这些差异背后的价值观中重新构建起了拥有自己风格和特色的作品。我相信这些都能给到在日本求学的玻璃艺术专业的学生们以极大的启发和指导。

国際ガラス展・金沢 2016 で奨励賞を受賞して来日した際に、愛知教育大学“AUE”で自作品についてスライドレクチャーをお願いした。その際、今回の Shanghai Museum of Glass での展覧会を控え、制作場所の悩みを吐露していた杜蒙に、AUE での滞在制作の話を持ち掛けたのは、彼女の制作が学生に対して大きな刺激になると感じてのことだ。彼女がスライドレクチャーで語った、Central Academy of Fine Arts でグラフィックデザインについて学んだ後に、RIT でガラスアートを学び、東洋と西洋、デザインとアートという異なる価値観の中で自身のアイデンティティを構築して作品を制作していく様子は、日本でガラスアートを学ぶ学生の大きな指針になることと確信してである。

杜蒙此次展览的灵感来源于她对于“无形的边界”或者说“无形的限制”这一概念的思考。所谓“无形的边界”指的是社会中所存在的条款和规则、潜藏在我们日常生活中的习惯与常识、充斥在作为社会人的我们周围的“限制”、以及存在于人类意识之中的“界限”。杜蒙在美求学期间，面对各种“无形的边界”，在接受的同时，又偶尔与其抗争，在这过程中不断地确认自己的人生定位，她将日常记忆的片段编织起来并融入作品之中。杜蒙所收集的器物与绘画都在记录她的人生，她的玻璃作品将日常生活所见的每个物件中所存在的故事直观地提取、再构建，从而创作出一个具象化的全新故事。这个过程其实就是为了一边关注自身、一边把自己从包围着的“无形的边界”中解放出来、奔跑着拥抱自由的艺术行为。

杜蒙の今回の展示のアイデアは “invisible boundaries”について考えたことから始まっている。“invisible boundaries”とはコミュニティーの中にある規制や規則、日常に潜む慣習や常識、世間体といった我々の身の回りに溢れている、人間の意識の中に存在する“boundaries”である。杜蒙はアメリカで学んだ際、様々な“invisible boundaries”に向き合い、それを受け入れ、時にはそれに抗うことで自分自身のアイデンティティを確認し、日々の記憶の断片を紡ぎ構築して作品を制作してきた。杜蒙が集めるオブジェクトやドローイングは彼女の人生の記録であり、ガラス作品は日々の生活の中で出会う物質の中に内在する物語を直観的に読み取り、再構築して作り出した新しい物語を具現化したものである。それは、自身を見つめながら、自身が抱える“invisible boundaries”から自由に向かって精神を解き放つための行為なのである。

杜蒙之前的创作，几乎都是窑铸的玻璃作品，但这次她在 AUE 艺术家公寓驻留时却创作了吹制玻璃的部分。玻璃融化后的可塑性与流动性，时常能让人感受到它的魅力。但吹制玻璃的制作流程有着其独特性，因为需要一定的技术门槛，所以对于她而言使用这种全新的创作方式无疑是一种挑战。对抗着技术层面的“无形的限制”，将自身完全融入另一种创作过程和价值观中，并通过此过程将自己的记忆铭刻在作品之中的创作行为，也可以理解为单身赴美、跨越重重心理魔咒的杜蒙把这所有的记忆全部编织进作品里，并不断反复的一种延续艺术生命方式。结合吹制与窑铸这两种技法，我们可以从她用 Found Object（现成艺术

品) 这种现代艺术手法创作的这组全新作品中，隐约看到向着这个展览发起挑战的杜蒙那顽强身影。

今までの杜蒙の制作は、キルンワークによるものがほとんどであったが、AUEでのアーティスト・イン・レジデンスでは吹きガラスによる作品のパーツを制作していた。溶けたガラスの可塑性や流動性は時に魅力的な表情を見せるが、吹きガラスはその制作工程の特異性から、技術的な習得というステップが必要になるため、吹きガラスを制作に取り入れるという選択は彼女にとって新たな挑戦であった。技法という“invisible boundaries”に立ち向かい、異なったプロセスや価値観の中に身をゆだね、その中から自身の記憶を作品の中に刻み込む行為は、単身アメリカに渡り、様々な葛藤を乗り越え、それらの記憶を作品に織り込む行為を繰り返してきた杜蒙の生き様とも通じる。吹きガラスとキルンワークという2つの技法に、ファウンド・オブジェクトという現代アートの手法を用いた氏の新たな作品群からは、この展覧会に向かう彼女の挑戦的な姿勢がうかがえる。

在被分隔成多个独立空间的展览“间”中，展示着她脑海中所铭刻的那些记忆片段交所织起来的故事脉络，这些故事以她的各种人生经历为蓝本，并通过作品组的形式展现出来。参观者将横穿这些被分隔的“间”，进入艺术家营造的故事情境之中，从而了解并触及到杜蒙独特的世界观。这，就是由她所经历的那些文化差异、现实与理想之间的矛盾、玻璃作品制作过程中发生的种种困难、身边所起的一切对立……这一系列所引发的“无形的限制”，以及根据她在面对这些“限制”过程中留下的记忆碎片所拼合建立起来的一整套故事架构。在这样一个由她建立的故事中，包含了太多因为环境、社会的压抑而导致的人类负面情绪。观者通过杜蒙的作品，或许也能够发现自己身上所存在、之前未曾察觉的“无形的边界”。

小さく区切られたいくつかのスペース“rooms”には、様々な経験をもとに彼女の脳裏に刻まれた記憶の断片による物語としての作品群が展示してあり、鑑賞者はそれらの“rooms”を横断し、物語の世界の中に入り込むことで、杜蒙の世界観に触れることになる。それは、彼女が経験した文化の衝突、現実と理想の衝突、ガラスで作品を制作する過程で起こる衝突等、彼女の周りで起こった様々な衝突によって生じた“invisible boundaries”に彼女が対峙した時の記憶の断片をつなぎ合わせた物語である。そんな彼女の物語には環境や社会によって抑圧される根源的な人間の悲哀が含まれており、鑑賞者は杜蒙の作品を通して自身の中にある“invisible boundaries”に気が付くこととなるだろう。